たとえば、海。ボクにとっての海は、沖に向っておつむを上げると、おひさまが目を焼く、大磯、こゆるぎの浜。長じて学び及んだのは、半島と半島の奥をさらい、深みへといざなう内ち海、浜の玄ろさだ。クロ。いや、まてよ、白か。まぶたに残るあのビキニがまぶしい新潟、陽は背にあったか。あるいは、無花果を頬ばった瀬戸内の浜は柔らに、肌色だったか。としても、いずれも恋着にはほど遠い。

ならば、街。大磯の国府本郷に生来住まうが、国府に本郷と接いだ御大層な行政名はなじまない。私は馬場、バンバの在だ。「ひとに会ったら、コンニチハするのよ」と言い聞かせられ育ち、じっさい、規矩正しくある老丈らに「よくできました、どこンちの子？」と尋ねられるのが挨拶、つまりはムラへの参入儀礼だった。野良育ちと言っていいざまで、犬さながら片足をからげ、猫を手本に夜の集会をしてもきた。終電に間に合えば、神保町から戻る遠距離通勤をつづけたのは、高麗山を眺めると都心のざわつきがおさまり、ネオンのない駅前の暗さに安堵するから。だから、わが街。

いやしいはおろか、おぞましいと私の断じるネット・サービスがある。「地図」からクリックすると、町並みの「写真」が被見される。街中をやたらと撮りあさるのは、覗き見趣味だろう。おそらくはそんな露悪が性根にあってはじまった仕儀だろう。プライヴァシーにさとい素振りは、像を消し、洗濯ものや布団をさらすまではせず、加工する。ところが、ひとその営みを消去されれば、街ではない。どこであろうと、そこは、廃墟だ。この仕業に、死の翳（かげ）の世界を、ホモ・サピエンスの喪しなわれた宇宙を見てとれなくなるまでに、私たちは情報の毒に糜爛（びらん）しているのだろうか。

たとえば、茅ヶ崎。仮にたとえばコワダ。オワダと訓んでも「小和田」とキーボードにうちこめば、地図を検索もし、写「真」をも提供される。車のナビは、小和田のマサエさん家まで、誰彼なく先導してくるはずだ。だが、私はそうはしない。お客さまから紹介をいただいて初めてのお宅に伺う際は、十二分に余裕をみる。道に迷っても間に合うくらいにではない。さ迷うがための時間をみる。辺りにコンビニがあれば、ガムひとつ買い、トイレを借りる（ガキの頃と変わらない）。活気ある市井の店を覗いてみる。お店の方とおしゃべりをして（やんちゃな頃と大差ない）、手づくりの豆腐や食パンあたりをぶらさげてくる。駐車はお宅からよっぽど離し、逍遥する。冬はマフラーとブーツ無しではいられない。暑ければ、背広を肩から揺らしながら、やっぱりぶらぶらと歩く。

過ぐる夏、名刺入を落とした。さてさて、上着の浅くしつらえた内ポケットのボタンを掛け損ねたのだ。見つからない。中の運転免許証はどこだ、どこだ。あちこちほっつき回ったツケで、続けて炎天下の半日。どうにも、探しだせない。夕刻汗みどろで、小和田交番へと足をひきずる。やんや。はや届けられていた。御仁がお住まいである。

季節の歩みも重ねつつ、一歩また一歩、私は確と街を知る。

まちかど

from 'Face to Face' to 'Hand in Hand'.

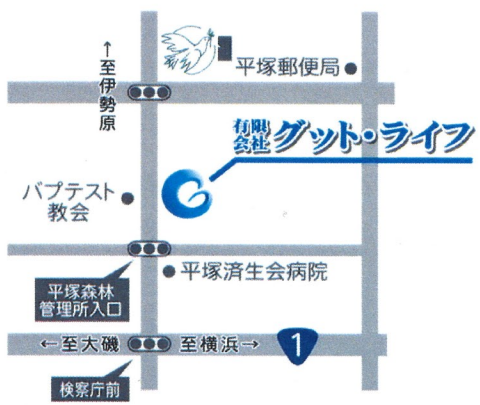
あなたのそばの保険代理店

goodlife@cosmos.ocn.ne.jp

グット・ライフ

TEL：0463-37-1955

FAX：0463-37-1966



All for your better lives, "Good Life"

marge

あなたの身近な問題を考えるのが、私たちの仕事です。
あなたにぴったりサイズの保険をおあつらえ致します。

アイスホッケー観戦記

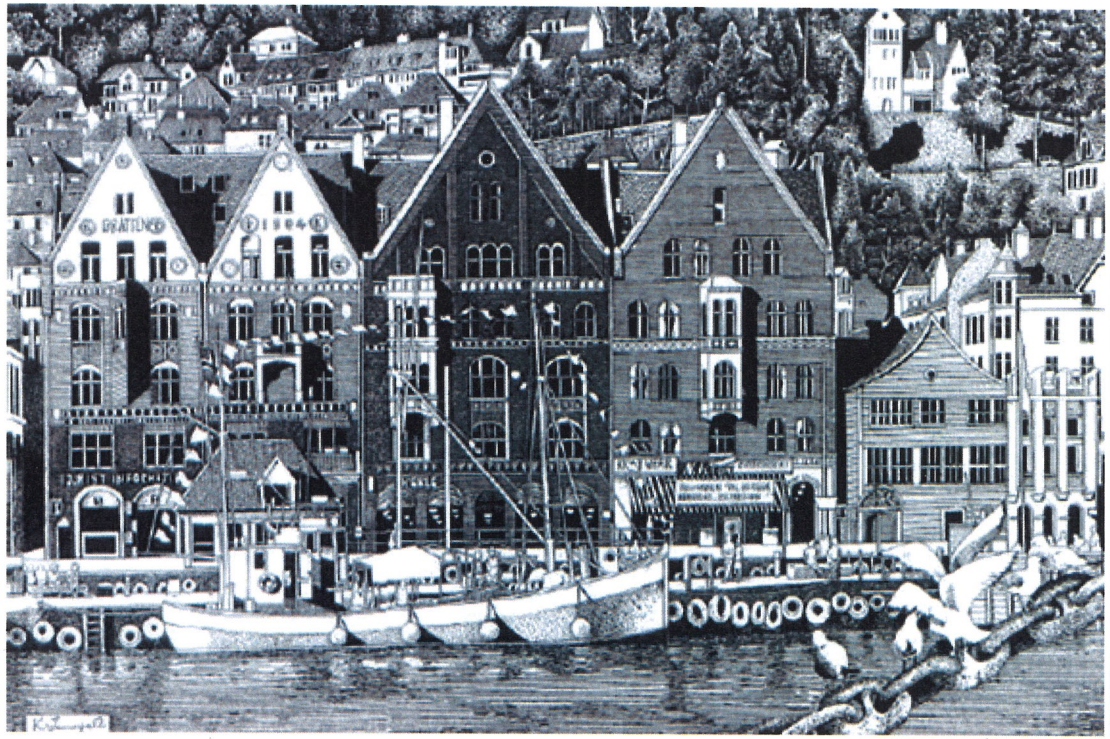
伊勢田 洋次

先日、ご契約者から招待されて、アイスホッケー・アジアリーグを観戦する幸運に恵まれた。会場の新横浜スケートセンターは、満員、招かれた席は３階の特別席であった。

特別席からの観戦は極めて贅沢なもので、選手の動きが一目瞭然、素人の私にも両チームの活躍ぶりが手に取るように見えて、アイスホッケーの楽しみを満喫できた。ご招待、ほんとうにありがとうございました。御礼申し上げます。

試合は、東北フリーブレイズ対日本製紙クレインズ、結果は6：2でクレインズが勝利したが、実に熱戦であった。１チーム6名、ゴールキーパーを除く5名、敵味方合わせて10人の選手が常に動きまわり、相手のゴールにパックを入れようとゲームを展開するのだ。何しろ平均身長180㎝、体重80㎏もあろう男がスティックを振り回して氷の上を滑るのだから、迫力がある。素人目には、選手の技術力や試合運びの優劣は勿論わからない。が、その迫力が尋常一様でないことは判る。アメフト・ラグビーやサッカーとは異なる重戦車の格闘技と映った程だ。機会があれば、再び観戦したい。

アイスホッケーに限らず一般的に、チーム単位で戦うスポーツを見るとき、個々の選手が、如何に全体を見ながらプレーをしているかに焦点を絞ってみるようにしている。　一見無駄な動きに見えても、次の瞬間、その動きが有効になり得点を稼ぐ場面はどんなスポーツにもある。つまり、そのようなプレーができる彼はいつも全体を見ているに違いない。
そして次の場面を予知して、前もって行動する練習・訓練をしているのだろう。などと勝手に彼の心中を推し量るのである。そして理想のチームは全体の中での自分の役割を自覚し、直ちに行動できる選手が多くいるチームではないか。また、このことは、社会の一般論として通用する法則ではないかと考える日々である。



謹啓、平素は格別のご高配を賜り、ありがとうございます。本年も、自動車保険のご契約者さまの多くの方が、一年間の無事故でありました。感謝の気持ちを込めて、素品を用意いたしました。ご契約の継続手続きの際にお届けいたします。小社からの花一輪をお受けとりいただければ、幸いでございます。

店主 敬白

賀詞に添えた詩 ‘APRIL RISE’ の第一連は LAURIE LEE (1914-97) 作、加島祥造訳のアンソロジー『倒影集』（書肆山田 ’93）より引く。リーには、この詩を含む処女詩集のほか四詩集に、〝A Rose For Winter〟というスペイン市民戦争に昏迷するアンダルシアでの体験記などがある (Penguin Books ’55)。

もし　この世に本当の祝福があるとすれば
いま私の見ているものがそれだ。
静かに夜の明けはなたれるひととき
しとど露をふくんだレモン・グリーンの朝が
目覚めた私の目のなかに濡れた光をしたたらすとき

もとの詩をみてみよう

If ever I saw blessing in the air
I see it now in this still early day
Where lemon-green the vaporous morning drips
Wet sunlight on the powder of my eye.

気がむくと、私は反訳まがいをして遊んだりする。たまたま、詩の感興は違うが、コンテキストを断ち切って、文脈の枠外に意味を浮遊させれば、まず過不足ない表現＝日本語訳を『和泉式部日記』にみつける。戯れる意欲が萎えた。

「ゆめよりはかなき 世のなかをなげきわびつつ あかしくらすほどに 四月十余日にも なりぬれば 木のした暗がりもてゆく。築土のうへの 草あを（青）やかなる、人はことに　め（目）もとどめぬを あはれとながむるほどに
春雨の　日をふるままに我 が宿の
かきねの草は　あをみわたりぬ」

私解では「春雨」は歌いだしの措辞。「我が宿」は「我」の後、小さく息をのんで切り、あくがれる私の日々の「我」までを主部と釈りたい。和泉式部の瞳をうるませる涙は仮構の「雨」だが、真に降っている。時空こそ異なるとはいえ、二人は、痛切に哀切に生きる、生きざるをえない質だったのだろう。詩人という種族の心眼に私は瞠目する。

佳子さん、モルディブ新婚旅行、続く瑞報に喝采。「万有の慈雨しめやかに汝(な)が盤(もとい)に降らむ。」と、母子の健やかを祈る